

作曲家の 魂を 伝えられれば…



永井 宏先生

の石渡日出夫先生に習っていました。先生からは、演奏技術よりは、音楽を感じることを中心に教えていただきました。

— 手や指に悪い遊びは断念しなきゃいけない wasn't it?

永井 それを断念しないから、母親に時々バーンと。外で走り回っていました。高校の時、野球ですごくきついライナーが来たのを捕り損なって脱臼したんです。その時もう、自分でやめようと思いました。

— 普通校でしょうか？

永井 ええ。幼稚園からずっとキリスト教系の学校です。音楽の先生から聖歌隊に誘われ、パレストリーナなんかを歌っていました。特に、《メサイア》は、クリスマス礼拝などでよく歌うので、ほぼ全曲に近く覚ええました。

— すごくいですね。パートは？

永井 バスパートです。高校になると、時間が足りなくなつて練習に行けなくなりましたが、本番近くなるとエキストラで呼ばれ、参加していました。音楽の授業では、よく賛美歌を四声体で歌っていました。時折先生は、「この賛美歌は《フィンランディア》と同じものから来てるんだよ」とか教えてくださいました。

— 素晴らしい先生ですね。

— 音楽との出会いは？

永井 始めたのが何歳か記憶にはないんです。父も国立のピアノ科でしたから、気がついたら弾いていました。小学校3年の時にグラインドピアノが初めて来て…。

— 大喜びされた？

永井 そうでもないのです。子供の頃は弾かされていたので…。音楽そのものとか、弾くこと自体嫌いではなかったと思います。ただ、何か母親に練習させられていた感じがします。母は以前、音

外で走り回っていました

— ご出身はどちらでしょうか？

永井 家は横浜の丘の上です。学校も全部丘の上で、丘じゃないところは、ここが初めてです。

が自然に育つていくとかは？

永井 子供たちが弾いている色々な曲を耳で覚えて適当に弾いていました。《バイエル》も弾いたし、幼稚園の学芸会で《ブルグミュラー》をのんびり弾きました。小学校3年の時からピアノを作曲家

楽の教員をやっていて、家でも子供たちにピアノを教えていました。歌が好きで、特に《ブラームスの子守歌》が大好き！とよく言っていました。

— レッスンを聴いているうちに耳

永井 ええ、本当に！先生が、関西の学校に赴任される時、「宗教音楽研究会」の伴奏の仕事を僕に託されました。指揮者は遠山信二先生でしたが、演奏だけでなく、年に2冊位中身の濃い印刷物を出していました。当時、バッハの《マタイ受難曲》の演奏回数が一番多い素晴らしい合唱団でした。

指揮もピアノも

—指揮はいつ頃から？

永井 大学2年生の時からです。当時は自主的に色々なことをやるのが盛んで、希望すれば学内演奏会で演奏できたのです。田中淑恵先生、武田忠善先生、山本英助先生：が同期で活躍されていました。そこで、バッハの《カンタータ》をやってみたくて…。それが指揮をした最初です。それを見た、まゐるめる座の部長が、「芸術祭で指揮をしろ」と言ってくくださったので、創作オペラの指揮もして。

—創作オペラの魅力は？

永井 色々な人が関わって、ごつた煮みたいなかで作っていく面白さがあり、新しい譜面から、様々なことを読み取り実現していくというのが実に楽しかった！オペラを見た誰かが「こつちで振れ」と。そういう連鎖反応で色々なところ

で指揮をしました。

—指揮をすると初見や譜読みが速くなるのでは？

永井 音を感じるのには速くなるけど、ピアノの場合、譜面が読め頭の中で音が鳴っても、手が動かなければしょうがないわけで…。

—ピアノと指揮の両方の準備！大変ではありませんか？

永井 とにかくピアノの前で練習しなきゃいけないから、その時間は絶対に必要です。で、指揮の為の譜読みは、ほとんど電車の中で。元々フーガみたいなものが好きで、楽譜だけ見て、音のないところで、音楽を想像しているだけでジワツときちやうのような時もあるのです。

—どんな感覚でしょうか？

永井 音と音の組み合わせで進んでいく様が、何かジワツと…。そうなる。ピアノを弾いても、自分で弾いている感じが薄れ、一歩離れてというか、何か弾かされているような状態になる時があるので。体に譜がずつと入って弾かされているというように、そういう瞬間というのがとても好きです。

—バッハ以外にはどんな作曲家や音楽がお好きですか？

永井 その時自分が扱っている曲の作曲家はみんな好きです（大笑い）。ワサワサ心を騒がせる音楽も

好きだし、ロマンティックなおいしいメロディも好きだし、…それから、若い時はショパンが好きで、ある時期はリストが好きでした。でもブラームスだけはずつと好きで、未だに棒を振り続けているのは、そこにも理由があつて、「ブラームスのオーケストラ作品！一生やりたい！」と思つても、ピアノストというだけでは絶対オーケストラ作品は演奏できない。指揮をしていけば時々チャンスがあるわけです。

—ソロで卒業演奏会にも選ばれていますか？

永井 卒業で自分も弾いて、4、5人伴奏したので、それは大変でした。知らない譜面を弾くということが本当に楽しかったんだろ。うな、と思います。伴奏は、声楽や器楽、色々やりました。それなりに徹夜して譜読みしたりしました。

未だにドキドキしちゃう

—大学・大学院の先生はお父様と同じ先生と伺っていますが？

永井 属澄江先生です。高校から習っていました。指をどうとか、手首をどうとかはあまりおつしやいませんが、とても基本に厳しい先生でした。フィーリングでギターと弾くと、もうダメ。先生のお宅

に何う時など、極度の緊張で、未だに成城学園の駅を降りるとドキドキしちゃう（大笑い）。

—ピアノを弾く時は、自分できつちり楽譜から…

永井 学ぶしかありません。レコードは、図書館にはありましたが、その時弾いている曲はあまり聴かなかつたです。聴かないで楽譜から自分で組み立てたほうが理想の演奏に…（できるかどうかは別として）。

—学生に勧められますか？

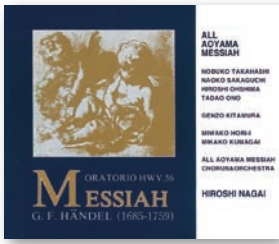
永井 うーん、それができれば一番良いと思うのです。膨大な時間をかけられれば、そのほうがいいけど、色々な曲を勉強して、ある程度能力を上げる為には、聴かないとダメでしょうね。

—その折り合いについて、アドバイスはありますか？

永井 学生に言っているのは、違う種類を7、8枚は聴きなさい。それで、気に入ったものがあつたら、朦朧とするまで聴きなさいとすると、その奥にある作曲家の何かを感じることが出来るかも…と。「表面づらの演奏を真似するのだけはやめようね」つて。

—楽譜には書き込みされるほうですか？

永井 書き込みしないと気持が散らばつてダメな時は書くし、書か



永井先生のCD～当館所蔵CDから。
XD43647-43648
ヘンデルの《メサイア》ですが、非常に
珍しい[プラウト版]による演奏です。

なくても済む時は書きません。でも、書いておけばよかつたと思うことはあります。何か妙なプライドみたいなものもあって、ちゃんと完璧に覚えなきゃ指揮しちゃういけないとか、ピアノを弾いちゃいけないとか。書いてあると、まだ何かそれに頼っているみたいで嫌だから、書かずに徹底的に覚える。ただ、その曲をそれから二十年間扱わなくて、またやる時、もし書いてあれば随分楽だったのにと。ピアノで言えば、指番号とか書いておけば随分楽だったなと。学生には、「これ、書いておいたほうがいいよ」という場合もあれば、「書かないで！そのぐらい常識でしょ」という時もあります。書き方にしても、「あなたはこうやって書いたほうがいいよ」と、例えばデクレシェンドでも即物的に書くのではなく、雰囲気を表すように曲線で書いたら、とアドバイスしたりもします。

忘れられない演奏の数々

— 感動した指揮者はいらっしやいますか？

永井 N響の《第九》のマタチツチ！指揮法がどうこうというのではなく、そういうのは超越して、その場が変わってしまふのです。もう一生忘れられないです。他にも、初めてN響で合唱団員として歌った《ファウストの劫罰》をやったジャン・フルネとか、もちろんスウィトナーさんとか、たくさんあるんですけど、みんなそれぞれに素晴らしい！

— 楽譜についてはどうお考えでしょう？

永井 あまりこだわらないです。主に新全集を使いますが、それ以外も。何かじゃなきゃダメだというのではなく、知り得る情報を全部知って、自分の中で音を組み立てていくという姿勢です。

指揮と指揮法

— 指揮をやっていて良かった点は何がありますか？

永井 ピアノに役立つことです。例えばベートーヴェンは、ピアノ・ソナタも書くけれども管弦楽曲も書いて、歌の曲も書く。つまり、

その作曲家の中で、いろんな楽器の経験、音のイメージが重なっているわけです。ピアノ・ソナタの中にも管弦楽的要素があつて、構築性だとか、音の組み合わせとかは、よく指摘されています。指揮をする時、弓使いのちよつとした慣習とかバランス、そういうオーケストラから得たものがそのまま「あ、ベートーヴェンってこういう感覚でこの付点音符書いてたんだらうな」とか見えてきます。

— 指揮法はいつ頃から？

永井 指揮法を勉強し出したのは38歳の時なのです。それまでは、学内演奏会や地方のオペラ、東京交響楽団も振りましたが、音楽だけで、音楽を頼りに指揮をやっていたのです。ただ、指揮法が身につけていないとやりたいことをやるのに非常に効率が悪い。ある程度指揮活動をしてから、高階正光先生の門を叩きました。当時、先生は、合わせるためだけの指揮法から、共感を持ってアンサンブルでできるような指揮法を構想中で、斉藤指揮法を発展させた本を出そうとされている時期でした。先生がおっしゃった指揮法の極意の一つは、「例えばコーラルの言葉一つ一つでも振り分ける。見て分かる！」、そういうことを考え始めていた時期にちょうどついたのです。

— 指揮法を身につける利点とかありますでしょうか？

永井 指揮法をやっていると、「1」「2」とあるんじゃないかと、「1ト2」というのが、「イット2」となるか、「イチトオ2」となるか、その「ト」までの持つていき方と、「ト」から「2」という感覚を否定なしに身につけねばなりません。それは、特にピアノストにとつては有益です。ピアノ一つ一つの音を弾いてから次の音を弾くまですることないわけじゃないですか。どうもつていたらいいか？フレーズをつなげようと、肩を動かす人もいますが、出ている音は同じです。そういうことよりも、音のでき方の感覚や、どういう音楽をしているかという点が重要で、音楽創りを進めていく上で、指揮法はとても役に立つものだなというのには、始めてみて気がつきました。指揮は音楽のイメージを形にしやすいのですが、形にする為には、自分の中で裏付けが必要で、フィリングだけではだめなのです。だから、そこが素晴らしいのが高階先生の指揮法で、重要点をきちつと理論化している。ただ指揮法は指揮法に過ぎないから、音楽的な中身がないと幾ら格好をやっても、そんなものはプレイヤーにすぐに見抜かれてしまいます。

指揮者眞利に尽きる時

—指揮者眞利に尽きる—というの
はどんな時でしょうか？

永井 こつちがあまり何もしないでも、皆が活き活きと、ワーツと弾き出して、歌いだした時、それをちよつと整理しながら音楽している時です。例えばそういう状態になりやすいのは《メサイア》のアーメンコーラスとか、幾つかありますけど。あと、とりあえず終わって、アンコールの曲が始まる時が一番幸せかな（大笑い）。

—選曲される時って、どんな感じなのですか？

永井 流行に乗る音楽会、好きじゃないんです。イベント的な音楽会というの好きじゃない。やはり内的な要望があって、叶えばそれが一番。内的な要望と相手の団体の都合で決まっていくなわけです。

—宗教音楽で頑張ろうという卒業生が増えてきて、その中心に先生がいっぱいいますか？

永井 いや、僕は大了したことないけど…。こういう時期にこういうものをやりたいという気持ちとか、やらせてほしい気持ちとか、色々あって、縁あって、ポンとそこに乗っていくだけで、それ以上ないのです。あと、宗教音楽で頑張る

うという人が増えてきた背景にはそういう録音が豊かになってきた影響も大きいのではないかと思います。

レッスンは眞剣に！

—学生に対するアドバイスがありましたら？

永井 やりたい音楽をやって…。でも一回一回のレッスンでは、今の瞬間でなければできないことを眞剣にやる！

—厳しいですか？

永井 怒鳴ったりはしませんが、嫌みは言うかもしれない（大笑い）。僕の先生も、怒鳴ったりするような先生ではなかった。何かチクリと。そのチクリが異様に怖かったですけど。くにたちにはいつも、勉強にもう一つ迫力が無い学生がいて、人が善くて、教わるのを待っていて、みたいな…。だけど、やる人はやる。

—みなさん、頑張っているらしいです。

永井 それと、「あの学校嫌いだ」ってならないのが素晴らしい。音楽をやっている割には、随分のんびりしている。何となくここに来るとほのぼのとして。楽屋にくにたち関係の人がいると和みます。不思議ですね。オケなんかでもみんな言いますね。

—ここが学んだ音楽の喜びは、誰

争過多でなかったから？

永井 競争で学べることもいっぱいあると思います。でも、競争のないところで学べることもいっぱいあるのです。それと、向き不向きがある。競争するところに行つたほうがいい人もいるけど、そうじゃない人が競争するところへ行くと、ちよつと悲劇で。ただ、学生時代、学校はのんびりしていたけど、自分たちがのんびりしていたわけではない。あつちへ行きこつ

ちへ行き、あれやってこれやって。くにたちで、ほんとにのんびりしちゃうと…。

—大変なことになってしまふ。

永井 だから、教育としては一番難しい。

—ご抱負をお願いします。

永井 とにかく二百年前とか三百年前に作曲した人がいるわけですから、その人の魂を伝えられればいいなと思うのですけど。

永井先生おすすめの本

- ▼「私の個人主義」夏目漱石 講談社学術文庫 K693（請求記号 J81-38）
- ▼「日本辺境論」内田樹 新潮新書 K777（TAC東京経済大学・津田塾大学所蔵）
- ▼「春宵十話」岡潔 光文社文庫 K500（請求記号 J28918）
- ▼「人間の覚悟」五木寛之 新潮新書 K714（TAC東京経済大学所蔵）
- ▼「どうせ死んでしまふのになぜいま死んではいけないのか」中島義道 角川文庫 K460（請求記号 J118123）

まじめに勉強すればする程、日本人がなぜ西洋音楽？という問題に直面するはずだ。

また音楽と深く関われば開ける程、「どう生きるか」を考えざるを得ません。音楽人生のスタートにあたり、是非読んで欲しいなどと思う参考書を挙げてみました。

書店で簡単に手に入れやすく、しかも廉価なものばかり選びました。

永井 宏（ながい ひろし）プロフィール

—「ぱるらんど」のための自筆—

1953年 横浜市に生まれる。
両親にピアノの手ほどきを受けた後、小学校3年生より石渡日出夫（作曲家）氏に師事。高校入学と同時に属澄江（ピアニスト）氏に師事。
1975年 国立音楽大学卒業、1977年 同大学院修了（ピアノ専攻）。
少年期に芸高（東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校）受験に失敗、ついで毎日学生コンクール（全日本学生音楽コンクール）で失敗。
以来、競争の場から逃げ続けた上に、他人と関わるのが苦手、また生来、万事に奥手なことも手伝って、なんともバツとしない地味な音楽生活を送り、現在に至る。「斉藤指揮法」を発展させた高階正光氏に師事したのは1991年、38歳。
母校に正規就職したのは2007年、54歳。
やっぱりなにかと遅い…。自分への挑戦を停止していたわけではないことは、（控え目に）つけ加えておいても良いかと思う。
「ぱるらんど」読者のくにたちの学生の皆さんのために…。

●いちかわ としつぐ “白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけり”先生の静かに深いお話を伺いながら牧水のうたを思い浮かべていました。美酒も良いお話も音楽もゆっくりと味わうべきかと…。